

## 新たにみつかった古墳時代の水田跡

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



南東上空から見た水田跡 現在の水田とはアゼの方向が異なっている。

京都市埋蔵文化財研究所では、伏見区淀水垂町・樋爪町で、発掘調査を実施しています。調査地は長岡京跡の東南部にあたり、これまでの調査で条坊の側溝や河川などがみつかりました。河川からは大量の人面墨書土器や模造した小型のカマド・土馬・人形などの、祭祀に使用されたと思われる遺物が出土しています。

その長岡京期の遺構面の下層で、古墳時代の水田と流路の跡がみつかりました。これらはほぼ全体が洪水によって運ばれた砂でおおわ

れていました。水田は桂川の右岸の後背湿地の中に位置し、西山の裾から南東方向に伸びた、標高が8.5～7.8 mのゆるやかな傾斜地に営まれています。水田は傾斜に沿った方向（北西から南東）に、一定の間隔で太くて高いアゼを造り、その間をさらに同方向の3～4本の小さいアゼで分割し、最後に直交する方向にアゼを設けて完成させているようです。ただ、調査区の北部では直交方向にも、ある一定の間隔をもって大きなアゼが造られ、方形の区画を設けて、

その中を分割していますが、西より順次つくられており形もいびつです。大きなアゼは恒常的なもので、小さいアゼは毎年造り変えられたものと考えられます。

水田の一つの大きさは5～150㎡で、形は方形または長方形ですが、亀甲形のものもあります。水田が比較的小さいのは、傾斜地で効率的に水をためるための工夫だと思われます。また、田から田へ水を移すための、水口と思われるアゼが途切れる箇所もみつかり、



水田に残る無数の足跡

水田面やアゼ上には多数の足跡が残っていました。その中には小さな子供の足跡もあり、家族総出で農作業をしていたと想像されます。また注目されるのは、牛の足跡がみつかったことです。牛を使って作業をしていたのかもしれない。

流路には、水田の用排水路と洪水の時の水の流路があります。洪水にともなう流路は全体に浅くて、砂礫で埋まっています。水田の用排水路は断面U字形の深くてしっかりしたもので、粘土質の土で埋まっています。たとえば、ある水

路は幅4～5m、深さ0.7～1mで、流れに直交して堰せきを設けています。

また、用排水路から直接水田に水を給排水した施設はみつかりませんでした。水口の位置などをみると傾斜に沿って北東の水田から南西の水田へ順次給排水されたものと考えられます。

水田の年代は、水田からの出土遺物が少ないためにはっきりとしたことはいえませんが、水田を覆っている砂礫層や洪水による流路などから6世紀後半の遺物が出土していること、そして水田の用排水路から布留式ふるしきと呼ばれる5世紀中

頃の土器が出土していることなどから、その間に営まれていたと考えられます。

出土した主な遺物には、土師器や須恵器のほかに、木製品の農具や滑石製かつせき ぼうすいしやの紡錘車があります。農具には馬鋤まぐわ・ナスビ形の鋤すき・田下駄た きね・杵きねなどがありますが、数は少なく、大半が用排水路から出土しています。木製品には、このほか盤ばん・槽そうなどの容器、木錘もくすい（木のおもり）、櫛くしなどがあります。

今回までの調査で、29,000 m<sup>2</sup>におよぶ広い面積で古墳時代の水田遺構を調査することができました。その結果、次のようなことがわかりました。

- (1) 水田は、標高8.5～7.8 mの北西から南東に向かって下がる、ゆるやかな斜面に造られている。
- (2) 水田一つずつの大きさが小さい。形は方形や長方形が多く、地形に沿って造られている。
- (3) 水田を造るにあたって、あらかじめ大きな区画が設けられており、計画性が認められる。

区画の計画性については、今後解明していかなければならない大きな課題といえるでしょう。

また、当時の耕作方法がどのようなものであったかについても不明な点が多く、確実なことはわかりません。さらに、これだけの規模の水田があるのですから、付近に大規模な集落跡が存在している可能性は十分にあります。これらについては、今後、発掘調査が進むにつれてしだいに明らかになっていくと思います。

(木下保明)